

【研究ノート】

イギリス中世末期における地域的市場圏〔Ⅲ〕

—デヴォンシャーのばあいについて—

藤 田 重 行

(3) 貿易と貿易商人

ここにおいてエクセターの貿易の趨勢を対象とする所以は、これによって当時のこの都市の海港としてのみならず経済上の発展を最もよく知ることができると思われるからである。

ところで、これまで述べて来たことによつて、この都市の十五世紀中葉とくに第四・四半紀以降の発展の生産的基礎が同市のみならずその背後^{ヒンター・ランド}地における毛織物手工業に——従つてその原料生産の牧羊業とともに——あったことは、ほぼ明らかであろう。フーカーも、羊毛を「この地方が産し、そして、大部分の人々にしごとを与え続けた最上の商品⁽¹⁾」であり、「たれでも、旅するところいづこにおいても、妻や子供たちおよび雇人たちがホールの戸口のところで紡車で紡ぐか刷子で刷毛しているのを見かけ、そして、その商品によつて、庶民が生活している。……」⁽²⁾と述べている。

時代が下るが、十七世紀初期の事態について、W. B. スティープンス W. B. Stephens も、「多くのイングランドの諸港の経済と同じく、エクセターの経済は、主要なる国民的工業である毛織物手工業と密接に関わっていた。西部地方の毛織物手工業は、湿地と高地とによつて相互に隔離され、そして、殆んど経済的接触をもつことのなかつた二つの地域に、位置していた。グロスターシャー、ウィルトシャー、ソマーセット東部およびオックスフォードシャー南部を含む第一の地域は、当面の時代の初めには尚伝統的なブロードクロスの生産地であり、ヨーロッパにおいて主としてロンドンの冒険商人によつて取引されていた。デヴォンとソマーセット西部である第二の地域は、ブロードクロスのごとくに縮絨されるが、短い羊毛はもちろん長い羊毛よりつくられる種々のタイプの毛織物を生産していた⁽³⁾」と述べている。これは明らかに当時西部地方の毛織物手工業地帯が二分されていたことを意味するものであるが、かかる隔離は実際にはこれより一世紀以上溯るものごとく、かつてデヴォン北部のバーンスタープルさえプリストルに惹きつけられていたのであるが、そこがその後毛織物製品をエクセターへ送り出していることや、既述のごとく、ソマーセット西部のトーントンが毛織物製品をブリッジウォーター経由でプリストルへ積み出していたのを、十五世紀末期以降エクセターへ変えたことを考えると、主としてデヴォン東部とソマーセット西部に

における毛織物手工業の拡大・発展に伴って、このころからエクセターが既述のごとき意味の「地方の商業中心地」として発展し、それとともに、西南半島部が一つの地域的市場圏を形成しつつあったことが想定される。しかし、当初は半島部西半に対するエクセターの経済的影響力は、尚間接的であったとみるべきであろう⁽⁴⁾。

それはとにかく、デヴォンにおける毛織物手工業の原料羊毛は、長く地元産の羊毛を使用していたのであるが、周知のアイリーン E. パワー Eileen E. Power の「イングランド中世史における羊毛貿易」によって知られるごとく、一般にデヴォンの羊毛は粗い下級品であって、羊毛が盛んに輸出されていたときに、ここにおける羊毛は輸出されることがなかったのである⁽⁵⁾。しかし、デヴォンにおいては1330年ころに「囲い込み」enclosure が一般化していたと言われ⁽⁶⁾、P. J. ボードゥン P. J. Bowden が言うごとき「囲い込み」の効果によるのか⁽⁷⁾、質的に州東部の赤土地帯で飼育される羊の毛が、州西部や西北部で産する羊毛より本来優っていたのか、それとも、これらの二つの原因によるのかは、いま容易に断定し難いのであるが、十五世紀中葉以降州東部において中級品の毛織物を産する同手工業の拡大・発展を齎したのみならず、十六世紀後期には少量ながら長い繊維の羊毛さえ産するところがあったと言われる⁽⁸⁾。これらの羊毛の供給は、デヴォンが当時小ジェントリの州と言われているごとく、ジェトルマン・ファーマーの牧羊経営によるものもあるが⁽⁹⁾、一般には北部地方のごとき大牧場の経営によるよりも、むしろ多数の小農たちの牧羊と農耕とを不可分のものとする個々の小保有地の間に分散して行なわれ（＝混合農業 mixed farming）、毛織物の生産もまた、家族的基礎に基づくものであり、原料羊毛の購入と織糸や織り上げた毛織物の売却は、種々の市場町の週市、殊にエクセターの週市において行なわれたと言われる⁽¹⁰⁾。マックカフリイはフーカーの「……商人か織元が織布職から毛織物を買ひ、そして、代金を支払う。織布職は紡毛職から織糸を買ひ、そして、代金を支払う。織元はかれの毛織物を縮絨職へ送り、そのしごとが終わったときに、同じく貨幣が支払われる。そして、次ぎに、商人あるいは織元が、それらを染色するか、かれの最上の利益となるように、ロンドンまたはその他のところへ送る⁽¹¹⁾」という記述を引用して、商人あるいは織元が毛織物を買取る以前の経過について、単に加工職相互の取引と見做し、そのころまでは、＜商人織元＞‘merchant clothier’が単に仕上げられた生産物を取引する商人にすぎなかったとしている。そして、十七世紀にはその組織が変化し始め、＜企業家＞‘entrepreneur’が全体の生産工程を通じて原料の所有主である購入者として現われ、イングランドの尔余のところと海外へのデヴォンの地域的輸出貿易の基礎を形成していた、かつての小生産者の雇主として現われるに至った。同手工業におけるそれ以上の変化は、新たな型の毛織物が1500—700年の間に発展するに従って起こったと言うのである⁽¹²⁾。しかし、フーカーが言う「商人か織元」を単なる商人とするかれの理解には、疑問を懐かざるをえない。確かに単なる商品取引の商人としての機能のみを果していた者が存在したことは、事実と相違ないが、かれらの中に染色

し仕上げて販売する者が十五世紀以来少なからず存在したのであろうことも、確かである⁽¹³⁾。エクセターには十六世紀に未だ染色職 *dyer* や仕上げ職 *dresser or finisher* のギルドが組織されていない。従って、かれらは商人あるいは織元の許に抱えられて屋敷内においてそれぞれしごとを行っていたか、従属して各自の家庭内において働いていたことが想定される。

次に、ソマーセット西部とデヴォンの毛織物手工業地域における1500年以後の生産される毛織物の型の多様化とその地域的特化が著しく、ソマーセット西部のトーントン、ウェリントン *Wellington* およびチャード *Chard* がこの地方で生産されるコットン *cotton* 生産の中心であり、1530年ころまでにエクス川とカルム川溪谷地帯から下流域がカージイの生産に特化し、ティヴァートン、カロンプトン、クレディトンおよびエクセターがその中心をなしていた。そして、クレディトン・カージイがとくに上質で知られていた。北部のパーンスタープルとトーリントン *Torrington* とは、時代を追って拡大するベイズ *bays* 生産の中心となった。西部、西北部、中部および南部においては、依然コース・クロスを生産し、それらのとくに粗いものの取引の中心はタヴィストックであったが、質的に向上しているところが多く、カージイに類似の毛織物と見做されていたように見える。十六世紀末期には、ここにおいても刷毛織物から梳毛織物へのいわゆる部門転換が著しく、北部のベイズと並んで、デヴォンを通じてサージ *serge (or perpetuanas)* がしだいにつくられるようになり、1615年までにエクセターから輸出されつつあった。但し、このサージは純粋の梳毛織物ではなく、梳毛織物用の縦糸と刷毛織物用の横糸とを用いて織られた交織織物であり、従って、縮絨工程を必要とし、純粋のサージよりは厚手の織物であったと言われる⁽¹⁴⁾。

エリザベス一世の治世は、イングランドにとって多難のときであり、オランダ独立戦争を契機としてスペインと戦争状態に入り、海上には私掠船が横行して、一時とり分け南海岸の諸港が被害を蒙った。フランスにおいては、周知のユグノー *Huguenot* の反乱が起こり、十六世紀末期まで不安定な政情が続いていて、その影響はエクセターにおいても認められ、表10でみられるごとく、絹織物織布職18名が移って来ていたことが知られる⁽¹⁵⁾。ユグノーの織布職は絹織物のみならず毛織物の新たなる技術をも齎したことが推定される。その間イングランドの毛織物手工業にとっての最大の打撃は、その最大の市場たるアントウェルペンの陥落(1585年)であり、その後毛織物市場はミッデルブルク *Middelburg*、シュターデ *Stade*、エムデン *Emden*、ハンブルク *Hamburg* へと順次に移されたが、オランダの独立後アムステルダム *Amsterdam* に定着することとなった⁽¹⁶⁾。しかし、その間失われた北欧、東欧および中欧の販売市場の回復は容易でなく、その結果、刷毛織物から梳毛織物への部門転換が行なわれ、いっそう季候の温暖なる南欧の新たなる市場の開拓に努めることとなったのである。

その間、既述のごとく、エクセターへの影響は比較的少なかったもののごとく、1560年代における運河の建設と上述のごとき毛織物手工業の拡大発展に伴って、その貿易量はしだいに増加した。

大陸における最も重要な市場は、依然フランスであり、次いで、スペインと低地諸国であった。十六世紀の第三・四半紀にはエクセターは、フランスと低地諸国へ主として毛織物と錫を、そして、スペインへ毛織物と鉛を輸出していた。これに対して、エクセターの当時の主要なる輸入品は、フランスからぶどう酒、塩およびキャンバス、リスボンから塩、スペインから鉄、低地諸国から種々の製造品であり、その中にホップ、^{リネン}亜麻布、紙、鍋、刷子、煙突用付属品 chimney backs? 靴の止め金、紐、鉄線および櫛を含んでいた。1570年代に錫の輸出が減じつつあったものごとく、他方、フランスからトゥールーズ Toulouse の大青、明礬および羊毛用刷子、スペインからセヴィリア Sevilla のオリーブ油、海峡諸島から塩、キャンバスおよびローマの明礬の輸入が著しくなり、依然低地諸国およびフランス北部のルアンから種々の製造品が輸入されていたが、政情の緊迫化とともに、フランスの比重が大きくなりつつあったと思われる。1580年代に入ってイングランドとスペインとの対立が激化すると、海上でスペイン船から捕獲した砂糖がエクセターへも齎された。十六世紀末期のエクセターの主要なる輸出品毛織物の1599/600年の関税収入は639ポンド6シリング5¹/₂ペンスであり、フランスからの輸入品目の一つであるキャンバスの同年度の関税収入は534ポンド4シリング6¹/₂ペンスであった。この数字にはフランスとスペインから輸入されたぶどう酒の関税収入は加算されていない⁽¹⁷⁾。

以上のごとき海外貿易と並んで、イングランド諸港との貿易も行なわれており、ニューカースル Newcastle から石炭やロンドンから高価なる食料、その他重量のあるもの、嵩張るもの等が輸入されていた。エリザベス一世治世31/2年のロンドンからの積み荷の小関税 petty customs の一記録により、鉄13トン、高級食料品13トン、石鹼8バレル、ピッチとタール4トン、良質の洋紅7梱、蠟燭3バレル、酢1トン、その他フライパン、つぼ、硫黄、キャンディ等が齎されていたことが知られている⁽¹⁸⁾。

エクセターの主要なる輸出品である種々の^{タイプ}型の毛織物は、既述の羊毛、織糸および毛織物の個別の週市の市場が設けられていたことによっても容易に想定されうるごとく、ソマーセット西部やデヴォンの多くの地方から集まり取引されていた。フーカーによれば「かれの時代に毛織物の毎週の取引は、各包20ポンドないし30ポンドの価値のものが約25包から30包に及んだ⁽¹⁹⁾」と言われる。換言すれば、その合計金額500ポンドから625ポンドの取引が毎週行なわれていたこととなり、それと並んで、市民＝商人が週市以外の日にも持ち込まれた毛織物を購入しうる特権を有していたことをも考慮しなければならない。織り目の出たままの毛織物は、最終的に縮絨され染色され仕上げられて、売却された。^{ウーニルン}刷毛織物のばあいには、縮絨後表面をフェルト状にして整える工程が続いて行なわれた。エクセターの市場へ齎された毛織物の中には、地方（毛織物手工業の中心の小都市）の〈織元〉によって完成されたものもあったが、多くは未完成品であり、エクセターはこれを完成させる上述のごとき工業の中心として繁栄した。そのためにエクス川周辺に市当局が相次いで縮絨用

表 11 Customs' revenue (£ s.) at the chief English ports

Port	1614	1615	1616	1617	1618	1619	1620	Annual Average
London	105,131	123,497	112,275	121,887	—	—	—	—
Hull	7,664	8,236	8,511	5,904	6,673	7,027	6,798	7,259
Exeter	4,096	3,709	3,716	4,427	4,919	5,133	5,727	4,533
Bristol	3,599	3,947	3,805	3,568	3,384	3,676	3,965	3,706
Newcastle	3,781	3,709	3,269	2,957	2,949	3,382	3,128	3,310
Plymouth	2,316	3,003	2,792	3,462	2,646	3,280	2,949	2,921
Lyme Regis	3,010	3,038	2,771	2,938	2,207	2,739	2,796	2,786
Southampton	2,350	2,604	2,674	3,220	2,940	2,725	2,740	2,750
Dartmouth	2,294	2,363	2,211	3,516	3,360	2,363	2,515	2,717

および染色用のミルを建設し、製粉用ミルや鞣皮用ミルと合せて、十七世紀には多数のミルが存在したと言われる⁽²⁰⁾。商人あるいは織元はこれを市から借り受けて、縮絨職にしごとを出し、次いで、手許において染色し仕上げて、販売したのである。かくしてエクセターは、この西南半島部の〈地方の商業中心地〉としてのみならず毛織物の縮絨・染色・仕上げ工業および輸出貿易の地域の中心として発展した⁽²¹⁾。十七世紀に入って1604年スペインとの休戦が成立するや、販路が拡大し、貿易量もいっそう増大した。その結果が、既述のごとく、関税収入において1614年に外港中ハルHullに次いで2位を占めるまでに至った。1614年から1620年までのロンドン以下主要なる外港の関税収入の推移は、表11が示すごとくである⁽²²⁾。

しかし、1621年に毛織物手工業に深刻なる打撃を与えた不況が訪れ、ロンドンにおけるほど切実ではなかったけれども、デヴォンとソマーセットにおいて多くの失業者を生じ、エクセターにおい

表 12 Market distribution of main types of cloth exports, 1624

Type of cloth	Market	France	Spain	Atlantic Islands	Baltic	Coastwise for overseas	Portugal	Channel Islands	Total
Devon Dozens	a	11,511	1,883	3,383	287	1,226	181	6	18,478
	b	£ 959	157	282	24	102	15	—	1,540
Perpetuanas	a	8,429	672	237	38	144	—	—	9,521
	b	£ 1,054	84	30	5	18	—	—	1,190
Barnstaple Bays (single)	a	2,381	631	292	—	—	—	—	3,304
	b	£ 238	63	29	—	—	—	—	330
Dunsters	a	384	102	563	—	—	—	6	1,055
	b	£ 26	7	38	—	—	—	—	71
Taunton Cottons	a	1,027	11	104	—	—	—	—	1,142
	b	£ 51	1	5	—	—	—	—	57
Total Subsidy		£ 2,328	312	384	29	120	15	—	3,188
a = number of pieces (wrappers excluded).									
b = Subsidy to nearest £ 1, according to the 1,610 Book of Rates.									

て関税収入の減少、事業の縮小および商人の間に破産する者が相次いで現われた⁽²³⁾。フランスとイベリア半島を主要なる市場とするエクセターの貿易は、1624年には回復著しく、この年に輸出された種々の型の毛織物輸出額の市場別は、表12の示すごとくである⁽²⁴⁾。この表において、カージイはダズンに含まれている。依然として旧来の刷毛織物であるダズンの輸出額が全体の過半を占めていることが知られるが、いわゆる〈新呉服〉‘new drapery’に属するパーペテュアナスやベイズの輸出額がすでに少なくなかったことを示している。しかし、いまこれをもって直ちにソマーセット西部やデヴォン各地の毛織物手工業の急速なる回復を意味するものとはなし難い。それまでの不況時のストックの処理がなされたことを考えなければならないからである⁽²⁵⁾。

ところで、この回復は永続しえなかった。翌年7月に疫病が起り、秋には伝播して、貧しい下層の者たちを除く富裕なる市民の大半が市外へ避難した。貿易商人はかれの商品を持ち去り、週市に羊毛、織糸、毛織物、穀物、その他の生活資料を携えて集まって来た商人や小生産者がいまは来ることなく、取引が行き詰まり状態を呈した。さらに、責任ある〈市参事会〉の過半の者や市の高級の役人から警吏に至るまで、かれらの任務を放棄し、貧民の救済に当たるべき教会の役員さえ逃避した。市長に選ばれたT.ウォーカー Thomas Walker が執務を拒否した。市の行政は混乱に陥り、貧窮化する者が増加し、暴動が起こった。その後ようやくして秩序を回復し、〈市参事会〉の踏み止まっていた少数の者たちが、王に対して、市長をはじめ役人たちが至急帰宅して任務に復する命令を発するように請願した。1625年10月3日から7週間〈市参事会〉の一員にして指導的清教徒のI.ジャーデイン Ignatius Jurdain が市長職を代行した。しかし、事態は少しも改まらず、同年末には貧民の数が4,000名に達し、尚増加しつつあった。疫病そのものは翌年にしだいに沈静化した。それでも当時の人口12,300名のうち2,300名が死亡したと言われる。市当局はあらゆる手を尽して貧民の救済と市の復興に努めたが、回復は容易でなく、尚2年後まで荒廃と貧困の跡が残っていたようである。疫病そのものはその後内陸に拡がり、数年に亘って多大の犠牲者を出したと言われる⁽²⁶⁾。

この災害をいっそう激しくしたのは、1625年5月に勃発したスペインとの戦争と、さらにいっそうの打撃を与えたものが、翌年に起こったフランスとの戦であった。スペインとの戦争の影響は、この年エクセター沖に入港した船の数が前年に比較して三分の一に減じたことに現われている⁽²⁷⁾。エクセターにとって最大の打撃は、これまでにしばしば述べてきた最も主要なる市場であるフランスとの戦であった。1626年まで海上において事実上商戦が行なわれていた。フランスにおいて押収されたイングランドの商品の中に、6万ポンドと評価されたエクセターの商人に属するものがあつた。1627年チャールズ一世はフランスとの一切の貿易を禁止した。1625年、1627年および1628年には、カディス Cadiz とラ・ロシェル La Rochelle 遠征のために、多数の徒兵と水兵としてデヴォンの若者を強制的に連れ去られ、さらに、多額の戦時課税を徴収された。海上には北アフ

リカ海賊船が25隻から30隻の船隊を組んで横行し、1629年にはフランスの海賊によって20隻の船が拉致された⁽²⁸⁾。1629年にフランスと、次いで、1630年にスペインと講和したが、その後も海賊の脅威は少しも減ぜず、一時トーベイ Torbay 近辺にかれらが集まり、商船が自由に通航しえなかったため、エクセターは政府に安全策を講ずるよう申し入れた。その結果、海軍の船2隻によって護衛を試みたが、殆んど効果がなく、デヴォンとコーンウォールの全海岸が依然危険なる状態にあった。以上のごとき種々の災害の結果は、エクセター港の1625年の港湾記録に記載されている輸出入の船舶数が前年の66パーセントに減少し、とくに第四・四半紀にはその数が極めて少なかったこと、また、疫病の沈静化後の1626年のミクルマスから翌年のイースターまでの6ヶ月間に輸入されたフランス産の亜麻布^{リネン}818反、ヴィッターリ Vittery のキャンパス 95,160 エルを1624年の半年平均^{リネン}亜麻布 3,775 反、ヴィッターリのキャンパス 133,440 エルと比較して知られる減少となって現われ、さらに、関税特別税の記録によって、1624・5年間の急激なる減少、そして、相次ぐ1626年と1627年のいっそうの減少、ついには1628年に最低を記録し、同年の主要なる輸出品の毛織物がデヴォン・ダズン695反、パーペテュアナス339反、サージ112反およびバーンスタープル・ベイズ 87 反とこれら以外の少量の毛織物にすぎず、その関税特別税収入合計が150ポンドにも達しなかったことによって⁽²⁹⁾、当時の不況の深刻さを容易に推定しうるであろう。

1628年の港湾記録に記載されている輸入関税特別税も、通常の貿易によるものが全体の三分の一に過ぎなかったと言われ⁽³⁰⁾、低地諸国と海峡諸島を経由して、フランスのキャンパスと^{リネン}亜麻布、スペインのぶどう酒、羊毛および果実、低地諸国から鉄、鋼、染料、網をなう紐、松材、紙、砂糖およびその他雑多なる品が各少量輸入されたにすぎなかった。残る三分の二は捕獲した敵の商船24隻の積み荷に対する課税とその船舶24隻の評価額の5パーセントとの合計であった。1626年から1630年までの間に、政府は捕獲許可状69通をエクセター、トプサムおよびエクスマス Exmouth の船主たちに与えたとされる⁽³¹⁾。フランスとの戦争の停止後も、両国の戦前にあった貿易上の軋轢が再燃して、チャールズ一世はフランスからのぶどう酒の輸入を禁じた。このこと自体はあまり厳守されなかったが、1630年にエクセターの毛織物がルアンとモルレイ Morlaix において押収され焼却された。これに対して、エクセターの船がルアンの船を捕え、トプサムへ連行して積み荷を押え、船員にリンチを加えた。しかし、かかる行為の繰り返しは徒らにエクセターおよびデヴォンの損害を大きくすることであったから、西部諸港の反対を押し切って「フランスと貿易するエクセターの商人組合」^{カンパニ}が対フランス貿易の指導権をとり、一定の規制によって、事態の拾収に努めた⁽³²⁾。これによって直ちに問題が解決したわけではなく、国内的にも対外的にも尚これに付随して幾多の困難なる経緯を経なければならなかったのであるが、当面これ以上このことに立ち入ってみる必要はあるまい。ここにおいて重要なことは、エクセターの貿易がいつのころから回復し始めたかということであろう。

表 13 Main cloth exports from Exeter with customs' subsidy paid, 1624, 1636, 1638.

Year	Type of cloth	Devon Dozens	Perpetuanas	Barnstaple Bays	Taunton Cottons	Dunsters	Straits	Spanish cloth	Kersies	Single serges	fustians
1624	Pieces	18,478	9,521	3,304	1,142	1,056	9	—	381	497	178
	Subsidy £	1,540	1,190	330	57	70			42	37	9
1636	Pieces	9,036	4,608	1,886	1,066	545	1,397	818	222	341	61
	Subsidy £	753	574	189	53		78	204	35	26	3
1638	Pieces	11,459	6,752	2,546	1,627	834	2,281	1,442	56	827	476
	Subsidy £	955	844	255	81	56	127	360	8	62	24

表 14 Customs' subsidy (£ s.) paid on main types of cloth exported 1624, 1636, and 1638.

market \ year	1624 £	1636 £	1638 £
France	2,328	1,056	1,286
Spain	305	140	456
Atlantic Islands	346	85	234
Netherlands	—	582	685

ステーブンスによれば、それは1632年から1634年までの間にその兆が明白になったものごとく、輸出入関税の特別税によれば、1634年の輸出は1624年のその二分の一強、そして、輸入がその七分の六であり、1636年には輸出入とも1634年を若干

上廻ったと言われる。さらに、2年後にはいっそう回復し、表13によって知られるごとく⁽³³⁾、種々の毛織物の輸出において1624年の84パーセントを越え、主要なる型の毛織物の輸出特別税のみについてみると、表14が示すごとく⁽³⁴⁾、1638年には1624年の89パーセントを越えていて、ほぼ回復しえていたと考えても誤りあるまい。しかし、これらの二つの表によって、次ぎのごとき二つの変化がその間に現われていたことが知られる。その一つは、輸出毛織物の型の多様化が著しく、依然伝統的なるデヴォン・ダズンの輸出が量的に首位を占めているが、総量において38パーセントという著しい減少を示し、これに代わって、スペイン織りのごとき新たな型のものが登場しており、それ以外に、粗製の毛織物ストレイツやトーン・コットンの輸出量の増加が著しいことである。変化の他の一つは、上述の輸出毛織物の変化に現われていることであるが、輸出市場の相対的重要性が変わったことである。要するに、十七世紀第一・四世紀まで、エクセターにとってフランスが主要なる輸出市場であるとともに輸入市場であったが、いまや低地諸国がデヴォン・ダズンの主要なる輸出市場として現われ、スペインとアフリカ西海岸の諸島が同じく重要性を増したことである。ストレイツとダズンは、既述のごとく、十五世紀においては粗製の類似の毛織物の名称として区別することなく用いられていたのが、デヴォン東部において同世紀末ごろからの羊毛の質的向上と技術的改善に伴ってカージイ類似のダズンが生産されうようになったのではないかと考えられる。ストレイツは専らアフリカ西海岸の諸島へ輸出され、ダズンは大陸へ輸出された⁽³⁵⁾。スベ

表 15 Individual Payments to Customs

Period (Christmas to Christmas)	Over £ 100		£ 100—£ 50		£ 50—£ 1	
	Number	Amount	Number	Amount	Number	Amount
1611—12	8	£ 1,748	21	£ 1,305	48	£ 687
1614—15	8	1,251	21	1,554	52	812
1616—17	14	2,138	20	1,410	63	771
1627—28	1	109	4	370	27	258
1635—36	19	4,202	8	537	78	1,238
1637—38	15	2,824	15	1,098	61	812

イン織は本来スペインから輸入された軟い羊毛を使用して紡ぎ、織糸を染色して織り上げた毛織物であって、1620年代から生産され、西部地方においてアイルランドから輸入した羊毛と地元の羊毛とを混じて用いたと言われ、その後その生産が拡大し、1640年にはロンドンから12,000クロス以上が輸出された⁽³⁶⁾。

ところで、エクセターにおいて貿易を営む商人の実体は、いかなるものであったのであろうか。エクセターにはロンドンの大貿易商人のごとき者は存在しなかった。また、エクセターにおいて貿易を営む商人のすべてがエクセター在住の商人というのではない。表15は関税記録から抜粋・作成された商人個人が支払った関税額の規模別に示した人数表である⁽³⁷⁾。例外的なる1627—28年を除けば、100ポンド以上を支払っている者が、1611—2年に比較して、1635—6年以後ほぼ倍加し、100—50ポンドの者が減じているのに対して、50—1ポンドの者がかなり増加していることが知られる。これらの数字のみによっていままんならかの明確なる結論を引き出し難いが、100ポンド以上を支払う者によって演ぜられた役割が、マックカフリイによれば、ここにおいて貿易を行っていた商人の中に、トーントン、ティヴァートン、チャード、バーンスタープル、トトネス、サウス・モルトン South Moulton, , エクスミンスター Exminster, トプサムおよびセント・シドウェル St. Sidwell 教区とヘヴィトリリー Heavitree 教区に居住する商人たちも加わっていて、これらの者たちの貿易が、つねに三分の一に達していたと言われる。そして、ときにはロンドンやブリストルの商人も、この港を通

じて貿易を行なうことがあったが、上述の者たちに比較すれば、その比率は遙かに小さかったようである⁽³⁸⁾。

次に、これらの商人が貿易を行なうのに使用した船舶についてみると、表16が示すごと

表 16 The Bulk of Exe shipping

Tonnage	Number of Ships		Tonnage	Number of Ships	
	1611	1637—38		1611	1637—38
12 tons	—	1	50 tons	3	7
18	2	—	60	7	5
20	3	6	70	3	1
26	4	—	80	1	—
30	8	10	100	2	1
40	5	7	120	—	2
45	1	—			

く⁽³⁹⁾、大部分が対岸との貿易であったのであるから、むしろ小型船がとくに多かったことが知られる。そして、保有船舶の総トン数も決して多くはなかったのである⁽⁴⁰⁾。それにもかかわらず、十六世紀に入って貿易がいっそう発展しえた状況は、尚フランスが主要なる貿易相手国であり、かつ、既述のごとく、その頂点の年であった1624年の同港の出入船舶の状態から容易に知ることができであろう。スティーブンスによれば、この年に同港を出航した船舶94隻中45隻がフランスの大西洋岸諸港に向けて出ており、入港した船舶152隻中86隻がフランスから来航したと言われる⁽⁴¹⁾。

ところで、既述の表15は、当時の貿易商人の間に、かれらが営む貿易量の相違、従って、ある程度富裕度の差異があったこと、そして、£ 50—£ 1 の関税を支払う者の数が漸増しつつあったことを示している。かつて資力のあるいかなる者も自由に貿易を営みえたのであるから、かかる趨勢は溯って十五世紀末期以降たえず現われていたことが想定され、かれらの中の富を蓄積し発展しえた者たちが、〈市参事会〉を構成し、十六世紀前期に既述のごとき経緯を経て〈商人寡頭制〉を築き上げたのである。それ故に、もし海外貿易によって富裕なる大商人に上昇してくる者が、たえず新たに出てくるならば、既存の市参事会員の経済的地位、従って、寡頭制支配の体制が脅されることとなるであろう。既述のごとく、市参事会員の中にも、経済的負担に耐えかねて脱落するか、怠慢もしくはなんらかの犯罪によって罷免される者がときおりあったのであるから、これを補充する交替要員が必要である。かれらは市民の上層を形成し市参事会員と利害をともにする比較的少数の富裕なる商人である。これらの者は決して多数である必要がない。おそらくかかる事態を阻止する目的をもって、市の経済統制のみならず、海外貿易の少数者による統制と独占を企てるに至ったのであろう。この計画の具体化がエクセターの冒険商人組合^{カンパニ}の創設である。当時収入役のフーカーが終始この問題に関わり、その詳細なる経緯を記しており、マックカフリイがこれに拠って述べているのであるが、いまその全体について記す必要はないと考えられるから、唯要点にのみ留めることとする。

最初1558年メアリ女王の治世末期にフランスと貿易する商人たちの請願によって、女王により法人としての組合^{カンパニ}を組織することを許されたと言われるが、女王の病気によって妨げられたためか、確かではなかった。そこで、商人たちはサー・ウィリアム・セシル Sir William Cecil に宛てて同様の主旨の請願状を送り、これに対して、翌年1月28日の返書において、「エクセター冒険商人の長および組合」‘The Warden and Society of the Merchant Adventurers’ の名の下に、市の商人16名に法人の組合の組織を認可された。その核心は、王国外で生産されたすべての商品の卸し売りのみならず小売り取引の独占権まで、かれらに与えたことにあり、その結果、同組合員の手に市の多くの商業活動を集中させることとなった。この点に関して、市内において仕立職およびこれと利害を同じくする織布職と縮絨職を中心として猛然反対が起こり、これに殆んどすべての組合も加わって、それによって受ける損害の調査を政府に要求した。そこで、政府は一時「冒険商人組

合」の特権を停止し、結局枢密院が仲介に入って、種々の経緯の末、1560年7月7日にエリザベス女王より新たに勅許状^{チャーター}を授与されて、結着した。これによって海外商品の卸売りの独占権は依然組合商人に与えられ、商人の数が少数の16名から49名に拡大され、さらに、続く3箇年手工業者にして希望する者は、手工業を止めて無料で入会しうることとされた。最後に、勅許状^{チャーター}に相互扶助の準備を具体的になすべき条項が付加されている。結局最初の輸入品の組合商人による小売り取引の独占権の削除と組合商人の数の拡大によって、不満が急速に沈静化したのである。尚、この組合は、勅許状^{チャーター}の授与とともに、直ちに組織されたのではない。同年8月6日にすでに60名に増加した組合商人中43名がギルド・ホールに会し、ウィリアム・ハースト William Hurst が初代の組合長として誓約し、理事4名を選び、勅許状^{チャーター}に従って、年々これらの役職者を選挙することを決定し、かれらに組合の一般的管理を託することとした。さらに、組合の規則と布告とによって、会議において20名以上の賛成がない限り、いかなる規則もつくりなすことを決めて、発足したのである⁽⁴²⁾。

他方、スティーブンスによれば、1560年に「フランスと貿易するエクセターの商人組合」‘The Company of Merchants of Exeter Trading to France’へ法人化の勅許状^{チャーター}が授与されたことは、同港の歴史における重要なできごとであり、この勅許状^{チャーター}によって、組合に同市におけるすべての商人に対する統制権を与え、いかなる市民も、この組合商人でない限り、フランスと貿易することを許されなかったが、これに入会するためには、とくに厳しい制限はなかった。そして、同組合そのものには幹部役職者による寡頭制的傾向が強く、かれらはしばしば市当局者＝市参事会員と同一であることがあり、市当局からときおり市所有の貨幣を貸し出され、つねにその支持を受けていたと言われる⁽⁴³⁾。

この組合は前述の冒険商人組合^{カンパニ}とは異なるものであったものごとく、エリザベス女王の治世にエクセターの貿易が著しく拡大したのであるが、冒険商人組合^{カンパニ}に授与された既述の勅許状^{チャーター}に相手国の港の指定がなく、すでに1566年、組合長と理事たちの主唱の下に、イベリア半島の諸港との貿易に積極的に乗り出しているのである⁽⁴⁴⁾。十七世紀前期に、既述のごとく、フランスとの貿易が停止され、一時スペインの市場も閉されたときには、アフリカ西岸の大西洋の諸島や低地諸国との貿易において、冒険商人の活動が著しい⁽⁴⁵⁾。

それはとにかく、ここにおける貿易の発展の生産的基礎がソマーセット西部とデヴォンの毛織物手工業の拡大・発展にあり、この工業が十六世紀第四・四半紀以降に生産物の多様化と生産構造の変化を経験することとなったのであるから、節を改めてこの問題に立ち入ることとする。尚、この問題のために、この地域における毛織物手工業の発展が遅れていたこともあって、課題の「中世末期」という年代の限定を越えて、近代のある時期にまで入らざるをえないことを、予めここにお断わりしておかなければならない。

- (1) MacCaffrey ; *Exeter.*, p. 161.
- (2) *Ibid.* ; p. 161.
- (3) W.B. Stephens ; *Seventeenth-Century Exeter. A Study of Industrial and Commercial Development, 1625—1688.* 1958, The University of Exeter. A Publication of the History of Exeter and South West Research Group. p. 3.
- (4) *Ibid.*, p. 8. 時代は下るが、ステューブンスは、『……そして、エリザベスの治世の間に、エクセターの貿易は著しく拡大した。1630年ころ一時代人が同市を「西部の諸地域の商業中心地」として描くことができた』と述べている。
- (5) Eileen Power ; *The Wool Trade in English Medieval History*, 1955. Oxford University Press. p. 23. アイリーン・パウア著山村延昭訳「イギリス中世史における羊毛貿易」社会科学ゼミナール 35 未来社刊。32ページ。
- (6) W.G. Hoskins ; *Industry, Trade and People in Exeter 1688-1800.*, 1968. The University of Exeter. p. 13.
- (7) Peter J. Bowden ; Wool Supply and the Woollen Industry, *Economic Historical Review*, 2nd ser. 9, 1956. *The Wool Trade in Tudor and Stuart England*, 1962, Macmillan. pp. 5, 6.
- (8) Stephens ; *Ibid.*, p. 4.
- (9) *Ibid.*, p. 5.
- (10) MacCaffrey ; *Ibid.*, pp. 160, 161.
- (11) *Ibid.*, p. 161, cited by MacCaffrey.
- (12) *Ibid.*, p. 161.
- (13) エクセターの毛織物市場へ持ち込まれた毛織物の多くは、織糸で織った織り目が出たままの織物であり、「商人か織元」が市所有の縮絨ミルを借り受け、縮絨職に縮絨させ、その後染色して仕上げるので、多額の資金を必要とする。そして、かれは卸し売り商である。
- (14) Stephens ; *Ibid.*, p. 4.
- (15) MacCaffrey ; *Ibid.*, p. 163. 尚表10参照。
- (16) Minchinton ; *The Growth.*, p. 6. いっそう詳細には、Jürgen Wiegandt ; *Die Merchants Adventurers' Company auf dem Kontinent zur der Tudors und Stuarts*, 1972. Kiel. Beiträge zur Sozial und Wirtschaftsgeschichte. Herausgegeben von Professor Dr. Wilhelm Koppe. Kiel. Band 4 参照。
- (17) T. S. Willan ; *Studies in Elizabethan Foreign Trade*, 1959. Manchester University Press. p. 80. 十六世紀末期からニューファウンドランドの魚類が再輸出品として登場する。MacCaffrey ; *Ibid.*, p. 167.
- (18) *Ibid.*, p. 168 and note 17.
- (19) *Ibid.*, p. 165, cited by MacCaffrey.
- (20) Hoskins ; *Ibid.*, p. 37.
- (21) MacCaffrey ; *Ibid.*, p. 166.
- (22) Stephens ; *Ibid.*, p. 8.
- (23) *Ibid.*, pp. 8, 9.
- (24) *Ibid.*, p. 10.
- (25) *Ibid.*, p. 9.
- (26) *Ibid.*, pp. 13, 14.
- (27) *Ibid.*, p. 14.
- (28) *Ibid.*, pp. 15-17.

- (29) *Ibid.*, 17-19.
- (30) *Ibid.*, p. 19.
- (31) *Ibid.*, pp. 19-21.
- (32) *Ibid.*, p. 22.
- (33) *Ibid.*, p. 29.
- (34) *Ibid.*, p. 26.
- (35) いっそう詳細には, *Ibid.*, pp. 26-30 参照。
- (36) *Ibid.*, p. 29. スペイン織は織糸を染めて織った毛織物で, かつて十四世紀に一時輸入され, 次いで, 国内で生産されたことがある。
- (37) MacCaffrey ; *Ibid.*, p. 170.
- (38) *Ibid.*, pp. 170, 171.
- (39) *Ibid.*, p. 169.
- (40) *Ibid.*, pp. 168, 169.
- (41) Stephens ; *Ibid.*, p. 9.
- (42) MacCaffrey ; *Ibid.*, pp. 136-148.
- (43) Stephens ; *Ibid.*, pp. 7, 8.
- (44) MacCaffrey ; *Ibid.*, p. 169.
- (45) Stephens ; *Ibid.*, pp. 26, 27, 31. 両組合が異なることは, 組合員がすべて別であることを意味しない。おそらく過半の者は両方の組合員である。

[未完]

付記 本稿で使用した W. B. Stephens ; *Seventeenth-Century Exeter. A Study of Industrial and Commercial Development, 1625-1688.* 1958. は, 慶応大学文学部教授森岡敬一郎氏の御好意により同大学付属図書館所蔵の同書を借覧することができた。ここに記して森岡教授と慶応大学付属図書館に深く謝意を表すものである。

(本稿は57年度文部省科学研究費の助成による成果の一部である。)